

# ヨシでびわ湖を守る ネットワーク通信

33

VOL.



## 西の湖で出会ったミコアイサ

撮影:TO

“今年の冬は水鳥が少ないな～”と或る人から聞き、西の湖を歩いていると。いました。奇妙な姿の鳥が。静かに近寄ってみると、何と用心深い！アッという間に飛び去ってしまい残念！気を取り直し待つこと30分？戻ってきました。今度は、遠くからズームを効かせてシャッターを切ると・・・獲物を啜って羽ばたく瞬間が撮れました。でも、画的にはイマイチ。素人写真としてはこれぐらいかと言いつつ聞かせ納得です。

ミコアイサのミコは、オスの羽衣が巫女の白装束のように見えることから由来しているそうで、ユーラシア大陸から越冬に飛来する冬鳥です。やはり、かなり用心深い鳥だそうで、くちばしの先がカギ状に曲がっていてノコギリのようなギザギザの歯で獲物を逃がさないユニークな特徴を持っているそうです。

### びわ湖を知る ■ 問題

ミコアイサの愛称は何というでしょうか？

- ① 巫女鳥
- ② シロクロガモ
- ③ スカクガモ
- ④ パンダガモ

## 滋賀県立琵琶湖博物館

特別研究員／結 creation 北村 美香 様より

### 「温故知新」昔の地域を知ること、 これからの地域や環境を考える

#### ～水辺にまつわる「地域の記憶掘り起こし」～

琵琶湖や川などの水辺と、人との関係構築を考えようとするとき、まずは水辺を身近に感じることから始まるのではないのでしょうか。少し昔の暮らしでは、生活の中に水辺を感じることができました。人びとはどのように水辺と共生し、どのような思いを持って過ごしてきたのでしょうか？

#### 【水辺と人との関係】

琵琶湖のめぐみを受けながら、私たちは滋賀に暮らしています。それは先人も同じことです。時代の流れとともに身近な自然や水辺との関係が変わっていく中、これからのあり方について考える上で、先人が自然や水辺とどのように関わってきたを知る必要があると考えました。

そこで、地域の歴史・記憶の中にある生活と共にあった水辺利用情報に注目し、地域の経験を発掘し、集めた情報を記録、活用することで、水辺と接する時間を日常的なものへと変えていくきっかけづくりを目指して調査を進めています。

今は、地域の記憶を辿る方法のひとつとして、古写真とそれまつわる情報を集めています。それぞれの家庭に残されているアルバムを見せていただき、当時の風景が写っている写真を見ながら、水辺や地域に関する経験や思い出をお伺いしています。調査を進める中でご提供いただいた古写真を活用して写真展を開催し、多くの方に見てもらう機会を設けることもできました。これらの機会でお聞きしたお話などは地域の記憶として整理して保管し、今後の環境を考えていく際の情報として整備していきます。



『写真を見ながらお話をうかがう』



『調査で得られた情報は、  
冊子にまとめて配布している』



『冊子紹介の新聞記事』

#### 【写真展での出来事】

昨年のゴールデンウィークには、調査を進める中でご提供いただいた古写真を活用して、大津市曾束地区で写真展を開催することができました。近隣にお住まいの方、観光のついでに立ち寄っていただいた方など、多くの方に調査成果を見ていただけたことができました。

今回の写真展では、天ヶ瀬ダム建設によりダム湖に沈むことになった旧外畑地区で撮影された写真や、今では廃船となった遊覧船に関する写真を中心に展示しました。7日間の開催で1300人ほどの方にご来場いただき、展示されている写真に関すること、地域に関すること、川や水辺に関することなど多くのことをお伺いすることができました。

# 特集 2ページ



『写真展の会場風景』



『展示写真とコメント』

お聞きしたお話は、他の来場者の方とも共有できるように付せんにメモし、展示写真に添えることにしました。写真を見てご自身の経験についてお話をくださった方。添えられたコメントを見て共感し、思い出されたことや感想などをお伝えくださった方など、それぞれの経験と記憶が溢れ出して会話の弾む場を作ることができました。ここで得られた情報は、音声データとともにすべて記録として保管しています。

写真展へご来場いただいた旧外畑地区にお住まいだった方より、後日水没以前の外畑地区を撮影した写真があるとご連絡をいただき、次の調査へと発展させることもできました。故郷の景色を忘れないように残そうとダム湖に水没した直後に友人と各家を訪ね、それぞれの家から写真を借りて回られたそうです。写真を集められた今から50年ほど前にはスキャナーなどがなかったため、一枚一枚撮影して複写されました。複写した写真をプリントして、写真展として外畑地区のお寺で開催したこともあるそうです。

今回写真展に来場していただき、いろいろとお話をさせていただく中で、この時のネガの存在を思い出されました。友人の方と一緒にご自宅を探してくださり、データ化までご自身でされて、ご提供くださいました。写真を見せていただきながら、「50年前に自分たちが考え、活動したこととこの活動の目的が大変似ていることに不思議な縁を感じています。我々の故郷や思い出、経験がお役に立てるのが嬉しいです。」との思いもお聞かせいただけました。時間を越えて、地域の方の想いをつなぐ事ができたのも、調査の中での嬉しい出来事です。



展示写真の中から  
『宇治川ラインの景勝地だった屏風岩』



展示写真の中から  
『昭和40年8月に柳ヶ崎水泳場で撮影したもの』

## 【調査を活用した今後の展望】

これまで水辺に接した経験が少ない方も、先人の経験を知ることで水辺との距離が縮まることもあります。水辺をまずは身近な存在と感じてもらい、水辺や環境、地域についてお話しするきっかけづくりに調査の成果が活用できるのではないかと考えています。そのためにも、まずは河川と先人の関わってきた経験や知恵の集積や、それぞれの河川での活動をよく知ってもらうことが大切です。水辺と人の関係について、少し昔のお話をきっかけに、コミュニケーションの機会を増やし、意見交換ができる場の創出と、将来的には環境保全や地域再生へ関わる人材の育成にも貢献していきたいと思っています。

水辺利用や環境への取り組みも、広くは街づくり、地域づくりのひとつの要素です。「温故知新」という言葉を大切に、今後も水辺と人とのより良い関係づくりに取り組んでいきます。



2019年2月  
淡海の川づくりフォーラムにて  
「山紫水明賞」受賞！  
右から二番目が筆者。

# ネットワーク 広場

## キューピー醸造株式会社

山北 佐穂里 様より



## 地域社会と共生するキューピー醸造

キューピー醸造はキューピーマヨネーズの原料用食酢を安定供給することを目的に設立されたキューピー(株)の子会社です。

キューピー醸造のお酢造りは、豊富な水と微生物による天然の力を利用して行われます。

地球環境になるべく負担をかけない事業活動を目指すことは、企業が持続的に発展していくために不可欠な社会的責任です。また、地域に暮らす住民の一員として地域・社会と共生していくために、信頼ある企業市民となることを目指しています。



『純粋玄麦くろ酢』

### キューピー醸造の商品をご紹介します【純粋玄麦くろ酢】

原料は大麦と水と発酵菌だけの純粋な醸造酢です。日本古来の菌蓋醗酵法(静置醗酵法)により、製造、熟成しており、香り豊かでコクのある飲みやすい黒酢です。

“キューピーアヲハタネットショップの中でお買い求めいただけます。”

### 【循環型社会へ】

生産工程で発生する約8百トンの動植物性残さをはじめとする、すべての廃棄物のリサイクルに取り組んでいます。残さの肥料化や分別収集の推進、廃棄物発生量の抑制のほか、微生物を使った排水の浄化などの取り組みを通して、五霞工場・滋賀工場で再資源化率100%<ゼロエミッション>を達成、維持しています。

### 【食品残渣肥料化で、環境にやさしい商品づくり】

キューピーグループではマヨネーズやタマゴ加工品の製造過程で発生する、タマゴの殻も有効利用しています。私たちは、これをお酢に溶かし、葉面散布用のカルシウム肥料を開発しました。この「葉活酢」を使っていた多くの農家の皆様から、作物が元気に育ち収量も安定したとの評価をいただいています。お惣菜や加工食品に利用される野菜を元気にすることで、お客様に喜んでもらえる商品づくりのお手伝いと、環境に配慮した活動を推進しています。



対照 葉活酢  
葉活酢の効果結果



### 【ヨシ刈りへの参加】

2014年からヨシ刈り等のネットワークの活動に参加させていただいております。自分達よりも背の高いヨシを刈り、まとめて運ぶのは重労働で、ヨシ刈りをする前は寒い日も、すぐに身体が温まり、汗をかくこともあります。冬の澄んだ空気のもと、日頃味わうことのできない貴重な体験をさせていただいています。毎回5名前後の参加で、参加者は少ないのですが、お酢づくりに不可欠な水をはじめとした環境保全に少しでも寄与していきたいと思っています。

# ネットワーク アルバム

## ヨシでびわ湖を守る ネットワーク

今シーズンのヨシ刈りは、ラッキーにも天が味方してくれました。12月の伊庭内湖、2月の西の湖とすべて(3回)晴れ、おかげさまで総勢600名を超える皆さんに参加いただくことが出来ました。



## 西の湖ヨシ刈り

第一弾:2月2日 (204名参加)

第二弾:2月16日 (232名参加)



来シーズンも宜しくお願いします。


## バイオマス調査～炭素(CO<sub>2</sub>)回収量評価へと

2017年から取り組んできた、バイオマス(生物資源量)調査が、学識者等で構成する「滋賀県ヨシ群落保全審議会」で高い評価をいただき、冬ヨシのカーボン回収量認定制度(仮名)が、いよいよ実現の方向で動き始めることになりました。現在、滋賀県琵琶湖保全再生課で準備が進められています。

この制度は、冬の琵琶湖周辺で取り組まれているヨシ刈りを通じてCO<sub>2</sub>回収量を、刈り取ったヨシの高さ(長さ)と刈り取り面積から県が評価していこうというものです。その評価の活用として、ヨシ刈りによって回収された炭素量を算出し、認定書を受けられることなど検討されています。

皆さんのボランティア活動の成果が科学的根拠に基づくCO<sub>2</sub>の回収量という形で見える化されるのです。

これにより、今まで以上にヨシ原の魅力が発信され、多くの人が関心を持つ、賑わいの場となることを期待しています。

びわ湖を知る ■ 解答 

④ パンダガモ

目先が黒く、まるでパンダのような顔をしています。

# みんなの リエデン

授賞式：2月20日

主催：文部科学省



## 平成30年度 青少年の体験活動推進企業表彰で

### 「審査委員会 特別賞」を受賞しました。

リエデンプロジェクトの活動を担う「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」の10年間の活動が文部科学省から表彰されました。

この賞は、社会貢献活動の一環として、青少年の体験活動に関する優れた実践を行っている企業を表彰し、全国に広く紹介することにより、青少年の体験活動の機会の推進を図ることを目的としています。



【浮島 文部科学副大臣】



【審査委員長より表彰状 授与】



【受賞者全員で記念撮影】



広く地域社会の皆さまと協働したネットワーク活動は、大人だけでなく参加者の家族(幼児から大学生)の皆さんと共に取り組んできました。振り返りますと琵琶湖周辺の豊かな自然環境の中で、親子のふれあいや絆を深めるコミュニケーションの場となっていることに気づかされました。地味で決して華やかな活動ではありませんが、これからも継続を第一に考え、実践活動を継続していければと考えています。まずは、会員の皆さまに心より感謝申し上げます。そして、これからも、みなさま方のご支援、ご協力を改めて宜しくお願い致します。